様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2014～2015
課題番号：２６８８３００６

研究課題名（和文）近世オスマン帝国のもの書く人々：文化的選良層の社会生活と心性についての文化史研究

研究課題名（英文）Life and Mentality of Ottoman Literary Writers:The Historical Sutudies about Ottoman Social Elites

研究代表者
宮下　遼（Miyashita, Ryo）

大阪大学・言語文化研究科（研究院）・講師

研究者番号：００７３６０６９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、近世オスマン帝国において「もの書く行為」の主たる担い手となった詩人たちの物心両面にわたる実態解明を行い、その社会生活が王朝貴顕／宮廷の財力と、職務任命権に大きく依拠する形で営まれた点を実証しつつ、その立身出世においては詩作能力の有無と優劣がその立身出世を大きく左右するというインフォーマルセクターにおける詩歌の社会的機能について指摘した。また彼ら心性についての研究では、「卑しい者ども」と呼ばれた都市の商工業者から成る庶民層とは著しく異なる「雅量」が彼らの価値判断帰順の中で大きな位置を占めていた点について明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In this study I researched the social life and mentality of Ottoman poets in the early modern Empire. Firstly it can be pointed out that their social life was heavily relied on the Court Society which was almost only power who can give poets wealth and opportunity of social success. Secondly it’s elucidated that their mentality were significantly different from the ordinary people consisting of craftsmen and merchants of the city, because Ottoman poets have a peculiar sense which is called magnanimity. In conclusion Ottoman poets can be regarded as Cultural Elites who had an ability of composing poetry and also pointed out about the social function of poetry writing skills in the Ottoman informal sector.

研究分野：トルコ文学史、トルコ文化史

キーワード：トルコ文学　トルコ史　東洋史　地中海通文化研究　都市史

１．研究開始当初の背景
オスマン朝史研究においては長らく、歴史学研究と古典文学研究の乖離が指摘され、その成果の共有は進んでこなかった。無論、こうした停滞は第一に地誌の僅少さ、都市の商工業者(庶民)の殆どが文盲であったために私史料が皆無であるという史料的制約に端を発するが、同時に社会経済史の発展という研究潮流の中で王朝正史や政治的論考を除く叙述史料、何よりも文学史料に大きな関心が払われなかったことにも起因する。端的に言って、豊富な文書史料の存在が今日のトルコ社会経済史の優れた成果を生む反面、そこに含まれない叙述史料、文学史料が傍流に追いやられ、社会史の立ち遅れを生む結果となったのである。

２．研究の目的
上記の如き研究背景の中で 21 世紀に入って以降、トルコ史を筆頭に中東歴史研究界においては社会史、特に心性史研究の遅れが指摘されて久しいが（例えば、H. İnalcık, *Şair ve Patron*, Ankara, Doğu Batı Yayınları, 2003; 林佳世子『オスマン帝国 500 年の平和』講談社, 2008; 林佳世子, 桝屋友子編『記録と表象:史料が語るイスラム世界』イスラム地域研究叢書, 第 8 巻, 東京大学出版会, 2005 など)、その抜本的な打開策は示されていない。本研究「近世オスマン朝の文化的選良層の社会生活と心性についての文化史研究」は、この研究の停滞を文化史の視座から克服する為に行われた。具体的には、15-17 世紀オスマン朝において帝都イスタンブルに集い、帝国の政治、軍事と共に、主に詩人として文化の屋台骨をも担った「文化的選良層」(詩作能力、ないしは詩を賞味しうる教養を持つウレマー、軍人、官僚)たちを主たる研究対象とし、彼らの実態を社会生活と心性の両面から社会史的手法によって解明し、研究完成の暁にはオスマン朝文化の在り方を地中海文化史の中に対置することを目的とした。

３．研究の方法
オスマン詩人を、専業詩人ではなく貴顕からの官職への任命ならびに金銭の下賜によって生活しつつ「詩作能力」を兼ね備えた「文化的選良層」として再規定し、その上でこれまで歴史学研究に用いられることの少なかった文学作品、わけても韻文の詩歌を中心としつつ、詩人列伝史料を用いてその実態解明を行った。具体的には、本研究は大別して 1 年目の**Ⅰ.**「文化的選良の社会身分と人的社会結合の実態」、2 年目の**Ⅱ.**「文化的選良の心性」という二つの段階を経て遂行される。これは、基本的には「官職保持者」に限定される支配階層に留まらない詩作能力を有した人々の範囲を正確に規定し、その社会身分(出身身分、官位、キャリアパターン等)と生活様式(金銭の獲得方法、個人的主従関係等)を理解した上で、そこに種々の文学史料に映ずる彼らの道徳観や差別意識のような心性史領域の研究成果を対置した方が、より明確かつ総合的に彼らの実態を解明しうると考えるからである。さらにⅠは①「文化的選良の社会身分」、②「イスタンブル文壇における人的社会結合」、Ⅱは③「文化的選良の生活意識」、④「庶民的心性の共有」という四つの研究項目別に段階的に進められた。

４．研究成果
まず上記研究項目の**Ⅰ.**「文化的選良の社会身分と人的社会結合の実態」については、特に各々の詩人の立身出世において重要な役割を果たしたことが各種詩人列伝史料より明らかとなっている献呈詩の影響力についての考察を通して、彼ら文化的選良層における社会生活が王朝貴顕／宮廷の財力と、職務任命権に大きく依拠する形で営まれた点、および政的排除の目的で、ときに根拠のない批判の種としてもそれらの詩が用いられた点を明らかにしつつ、オスマン社会における文化サロン（meclis）、および有力者一門（kapı）といったオスマン社会のインフォーマルセクターにおける詩歌の社会的機能の万能性について指摘した。
一方、**Ⅱ.**「文化的選良の心性」については、文化的選良層、庶民層双方の心性をおのおの抽出した上で比較する手法を取った。まず「卑しい者ども」と呼ばれた都市の商工業者から成る庶民層の持つ都市観を抽出した上で、彼らの「俗信的生活意識」と呼ぶべき心性を例証した。ついで庶民を嘲笑う冗談詩（letaif, hicviyye）史料の分析を通して、不潔さや無知といった要素を過度に強調された卑しい者ども（erazil）としての庶民像が、韻文、散文を問わずに選良層に広く共有され、民衆蔑視観と呼ぶべき心性が見られたことを例証した。その上で、詩作という芸術的行為が、他者への献呈、公表という表出行為の段階では雅量(zarafet)という独自の価値判断基準を軸に行われるという叙法に及ぼす影響を考慮しつつ、文化的選良層／詩人の心性の特徴を「雅人」という庶民とは著しく異なる人間像を理想とする点に帰した。

**5．主な発表論文等**
**〔雑誌論文〕（計 4 件）**

・「母語で描かれた越境：トルコ文学における異郷ドイツのイメージ変遷」『Ex Oriente』Vol. 23, 2016, pp. 25-57.

ドイツ連邦共和国は、トルコ共和国にとって 1950 年代以来、主要な出稼ぎ労働国、移住先となってきた。畢竟、トルコ現代文学においてはこのドイツこそが主要な異郷として描かれｒ続けてきた。本稿では、トルコ小説における異郷ドイツの表象的変遷を、50 年代から 21 世紀まで追い、50 年代以来まずはプロレタリア小説において労働者の前線、困苦の地として描かれたドイツは、その後、移民第二世代、および亡命作家たちにおいては故郷喪失の場へと変じたことを明らかにしつつ、そもそもことで「越境」という文学的研究視座が作家の自主選択的な言語的越境に依拠する限りにおいて優子杖あるというその限界点について考察した。

・（研究ノート）" Divan Şiirinin Japoncaya Çevrilmesi Üzerine Düşünceler", Esin Esen(trans.), *Kurgu Düşün Sanat Edebiyat Dergisi*, Sayı 15, Kurgu Kültür Merkezi Yayınları, Ankara, 2015, pp. 94-99.

本稿はトルコ古典文学の主軸を為す韻文作品を翻訳する際の指標を提唱した研究ノートである。トルコ古典詩は、短音と長音から成るから成るアラブ韻律を踏む対句を最小単位として詠まれるが、これを音節詩を主たる詩歌として営んできた日本人の美意識に沿う形で翻訳するため、アラビア語単語の漢語への、トルコ語単語の大和言葉への翻訳、五音節句と七音節句の自由な並べ替え、脚韻の導入、ルビを用いた掛詞や洒落の再現といった指標を、漢詩の書き下しの伝統と比較しつつ提唱した。

・「越境なきディアスポラ作家ラティフェ・テキン：「我が家の言葉」をめぐって」『世界文学』119 号，2014〉pp. 41-48.

80 年代作家としてオルハン・パムクと双璧を為すと目されるトルコ現代作家ラティフェ・テキンを扱った文学的言説研究。その初期二作品に描かれた農村から都市への移住体験を、テキンの作品の最大の特徴である「我が家の言葉」(evimin dili) という叙法を主軸に分析し、トルコにおいて方言が一方では純粋な民族の言語と称揚され、他方で農民の言葉として蔑まれるという政治的、文学的風土の中に対置した。その結果、彼女の文学の特徴が、60 年代に広く見られ、また農村小説の文脈では社会主義的な政治的筆致の溯上に乗せられた都市への移住体験を、完全に個人的なものとして咀嚼し描くというモダニズム性にあることを指摘した。

・「16 世紀「描写の書」に見るオスマン朝古典詩人の商工業者像」『イスラム世界』79 号，2013, pp . 1-27.

16 世紀のオスマン詩人における庶民像を論じた社会史、文学(史)研究。古典文学では社会生活の実態や生活心性の機微は殆ど描かれなかった、という歴史学の通説への反証とするべく書かれた論考であり、歴史学においては研究の立ち遅れも見られる 16 世紀の都市民衆/商工業者を研究テーマに据え、彼らを揶揄的に詠む「描写の書」ジャンルに属する 3 点の韻文詩の比較検討を通して、商工業分野の有力者と市井の職人たちを職業ごとに分析した。結論として、古典詩人の言説空間においては「雅人」と対比される「卑しい者」としての庶民像が定着し、なおかつその揶揄や蔑視の表明が確固とした文学的叙法を形成したことを明らかにした

〔学会発表〕（計 5 件）

・(学会発表)「16 世紀オスマン詩におけるトルコ語語彙の地位：簡明トルコ語派詩人を中心に」日本中東学会第 32 回年次大会, 於慶応大学, 2016 年 5 月 15 日.

・(講演)「イスラーム文化圏の文学的伝統とその近代化：オスマン帝国からトルコ共和国へ」大手前比較文化学会, 特別講演, 於大手前大学さくら凪川キャンパス, 2015 年 11 月 6 日.

・(講演)「祖国の言葉、外の言葉：トルコ共和国における文学的言語」公開講演会「EUTASİA：トルコ文学越境」於早稲田大学, 8 号館 819 教室, 2015 年 6 月 20 日,

・(研究発表)「アナトリアの吟遊詩人ヤシャル・ケマル：リアリズムの先、山の彼方」中東現代文学研究会、於早稲田大学イスラーム地域研究機構, 2015 年 6 月 21 日.

・(研究発表)「トルコ古典詩における職人の美化：「床屋の書」を中心に」日本中東学会第 30 回年次大会, 於東京国際大学, 2014/5/11.

〔図書〕（計 3 件）

・(共著) 宮下遼「イスタンブルの民衆と奇物：驚異から日常の中の異常へ」『〈驚異〉の文化史：中東とヨーロッパを中心に』山中由里子（編）, 名古屋大学出版会, 2015, pp. 416-432.

科研費共同研究プロジェクト「驚異譚にみる文化交流の諸相：中東・ヨーロッパを中心に」(代表山中由里子) の成果発表となる論文集において、オスマン朝における「驚異」(acaib)の展開を日常生活の観点から検討した。イスラームを奉じるオスマン朝の帝都にありながら、ギリシア・ローマ、ビザンツ期の遺構が市内各所に残るイスタンブルは、ムスリムから見て常に「異郷の気配」を漂わせる空間でもあった。本稿では、そうした気配が俗信に昇華された実例である「奇物」(tılsım、英語タリスマンの語源)を通して、公的な史料には現れない都市の怪異というイスタンブルの歴史的重層に拠った庶民の俗信について論じた。

・(翻訳)・オルハン・パムク『僕の違和感』宮下遼訳、早川書房、上下巻、2016.

ノーベル文学賞作家オルハン・オパムクの最新長編。これまで都市の選良層を中心に作品を綴った作者が、はじめて農村出身者（それは同時にトルコの都市人口の大半を占める人々でもある）の目線からイスタンブルの都市化の過程を俯瞰しながらも、それまで二項対立的に扱われた「イスタンブル」と「アナトリア」へ架橋する要素としてのソカク（路上）という新たなトポスを導入した作品である。

・(翻訳) ラティフェ・テキン『乳搾り娘とゴミの丘のおとぎ噺』河出書房新社, 2014.

オルハン・パムクと共に「80 年代作家」と呼ばれ、現代トルコを代表するポスト・モダニズム作家として認知される閨秀作家ラティフェ・テキンの代表的小説作品。イスタンブル郊外のスラム「花の丘」の盛衰を綴った作品である。農村、および都市における貧困が、一方では農村小説に、他方では左翼小説に収斂していったトルコ文壇にあって、80 年代初頭にこれをマジック・リアリズムの手法で再解釈し、都市に移入された農村的生活様式、事物を貧困の象徴としてではなく、まったく新しい「都市内農村」に固有の文化として再定義、異化し、のちのエリフ・シャファクなどのいわゆる「ゴミ小説」に先鞭をつけた重要の作品である。

〔その他〕

・トルコ文芸文化研究会（代表；宮下遼）
年に二度の研究会を実行。２０１５年度中は二回の定例研究会を実行した。

**６．研究組織**
**(1)研究代表者**
**宮下遼**（MIYASHITA, Ryo）
**大阪大学言語文化研究科言語社会専攻アジア・アフリカ講座トルコ語専攻・講師**
**研究者番号：**00736069